

北村透谷と民衆：自由民権運動との関連をめぐって

著者	許 培寛
雑誌名	文学研究論集
号	10
ページ	155(40)-170(25)
発行年	1993-03-01
その他のタイトル	Toukoku Kitamura and the People : On his Relation with the Democratic Right Movement
URL	http://hdl.handle.net/2241/14141

北村透谷と民衆

—自由民権運動との関連をめぐって—

許 培 寛

1. はじめに

北村透谷は自由民権運動に参加した文学者の一人として、日本近代文学史の中でユニークな位置を占めている。彼は時代の潮流が国家主義、軍国主義にむかい、かつての自由民権の左派指導者たちが、あいついで激流にのまれていったとき、日本の平和運動の先駆けとして、断固としてその流れに抗したのであった。また、彼は日本においてはじめて「政治」と「文学」との問題をトータルなものとしてうけとめ、これを追求した人物でもあった。彼は、民衆運動の退潮期に、あえて時流に抗して民衆を基盤に据えた思想の獨創性、純粋性を保持し、それをいかに表現することができるといった思想と文学との葛藤をエネルギーに戦って、力つき、倒れた。その志は、わずか二十五年四ヶ月での自殺によって、つらぬきえなかったが、彼の生涯の軌跡からたどられる教訓は大きい。

透谷は日本近代文学史の鬼才で、このジャンルを研究しようとする者は、一度はこの鬼才にふれて発言しているとさえいわれる。ところが、「自由民権運動と透谷」についての本格的な研究となるとほとんどののが学界の現状なのではなからうか。古くは小田切秀雄氏、勝本清一郎氏の基礎的な研究から、それを受けた平岡敏夫氏、桶谷秀昭氏の研究があるぐらいである。なぜ学的蓄積が少ないのか。それというのも政治と文学といった先鋭的な境界研究に多くの国文学者がしり込みしたことによるのだろう。が、それとともにこの時代の透谷についての資料が極端に乏しいことも大きく影響していることは見逃せない。

この時期の資料としては、直接、透谷自分の書いたものでは、漢詩二篇（明治十六年ごろ）、哀願書（明治十七―十八年ごろ）、富士山遊びの記憶（明治十八年ごろ）の三つしかない。また、透谷自身が回想して、この時期の民権運動と自

らの関係を多少とも伝えている資料としては、明治二十年八月十八日石坂ミナ宛書簡、同八月下旬父快藏宛書簡、同十二月十六日在米石坂公歴宛書簡草稿、二十一年一月二十一日石坂ミナ宛書簡と、それに「三日幻境」(明治二十五年八月九月)の五つが挙げられるに過ぎない。このうち前の三つが根本資料で、後の五つはかなり厳しい資料批判をおこなって、回想としての歪みを修正した上ではじめて使用される参考資料である。本稿ではこのような資料に一定の処理を施すことで、民権運動期の透谷を浮かび上げるとともに、その後の評論活動を支えることとなる透谷の民衆観をまず検討してみたいと思う。このような基礎研究を積み重ねることによって、やがて透谷の思念する民衆の眼から、あらためて透谷文学を捉えかえす契機が生まれてくるものと信ずる。

2. 民権運動期の透谷

透谷の民権運動への出発は、明治十六年三月、地方民権家が多数在職していた神奈川県議会の臨時書記としての職を得たことから始まる。当時の県会議員の多くは旧幕以来の名主層に系譜をひく名望政治家であり、在地での民権運動の指導者でもあった。そのような環境の中に身を置くこととなった透谷は、元来、平岡敏夫氏のいう「権力の一部となるという立身出世の面と、天下国家の事を論じるという一面をあわせもつ士族性」の持ち主として捉えられるのだが、それとともに見逃してならないのが少・青年期に培った「英雄豪傑たらんとするアンビション」⁽²⁾をその心に秘めていたことではなからうか。そのアンビションを発条とする性向からすれば、透谷が早くから政治の世界になじみやすいのも自然のことであつた。彼もまた、当時の中流階級の子弟が一般にそうであつたように、「軍事をまねる」遊戯をもつとも好み、常にその大将となり、「己れの一身を是等の英雄の地位に置かん事を望み居る」「アンビション病」⁽³⁾にとりつかれていた。ただ若き透谷の政治的野心も地方の村落共同体に入り込んでみれば、在地の青年活動家とは異なり、やはりその行動も規制されざるを得なかつたであらう。というのは都市知識人としての透谷を拒否する構造が村落にあつたからである。それが村落の政治行動を律する地縁血縁性であつたと思われる。それゆえ在地の名望家にして民権運動家であつた県議の知遇を得ることは難しかつたのではなからうか。

したがって、透谷の民権運動は限られた集団内の同志的なつながりの中で始まつたが、明治十六年九月、東京専門学校

政治科に入学⁽⁴⁾し、三ヶ月後の同年十二月、東京神田の静修館に入館⁽⁵⁾することにより、更に彼らとの同志的な連帯感を強くしていった。静修館は明治十六年末に神奈川県有志が同県出身の在京学生のために設立した寮である。大矢正夫の自叙伝によると、大矢自身は「断然教職を辞し、父母の承認を得ずして東京に遊学す」といい、「自分はこの遊学たる尋常一様の学問修行の目的にあらず。他に大いに志すところありしなり」と野望ともいつてよいものを吐露している。この発言からみても、同館の性格は単なる在京学生の勉学の為の寮というばかりではなく、神奈川自由党青年部の合宿的な色彩が濃く、透谷が入館する頃には、そこに集まった学生たちは観念的な政治青年の域を脱し実践的な政策論をたたかわす地方政治家の卵であったと思われる。

いかに村落の民衆運動が地縁血縁的な共同体の連鎖によって組織化されようと、透谷の政治的熱気はよそ者の参加という水準をはるかに越えるものであって、そのことは明治十七年前期に三多摩の山野放浪という形で発散される。しかし透谷が静修館という地方政治家の卵ともいべき小集団の中でどのように民衆運動をとらえていたかは明白ではない。ただいえることは、静修館がたとえ県の青年部の合宿的色彩が濃厚であったとしても、所詮そこでの生活が一般民衆と共にあるということは無理であったろうということである。在地の村落から隔離された合宿所での生活は、「嗚呼、志士仁人は身を殺して仁を成す、縦令ひ鮮血を青草に漑ぎ髑髏を白沙に爆すと雖も、一国衆民の為に幸福自由を進め、美勲宏績を奏することを得ば、愛国志士の冤魂は笑を含て地下に瞑目せんのみ」という民権士族派の雑誌の主張に見られるように、士族の立場からの「志士仁人」の意識を増長させる場であったのではなからうか。このような意識によって把握される民衆像は当然自立的で独自の政治活動を積極的に示す民衆というのではなく、貧困型で政治的にはきわめて消極的、受動的な民衆として捉えられていたとみてよからう。その背景には、民衆は教化すべきものという、彼らを見下す志士仁人の姿勢が明かにみてとれよう。

しかしそれでも、自己を犠牲にしても濁世を救済するという気概に満ちていた志士仁人の意識は、当時（明治十六年）の彼のガラス写真による半身像を入れた桐箱の蓋の表裏に墨書された漢詩⁽⁷⁾に見ることができる。この漢詩に見られる気概は、自由民権思想の受容の結果ではなく、強烈な士族の系譜意識からする志士仁人が、持たねばならない自己と国家との一体化による、国家への関心から生まれたものにほかならない。このような志士仁人の意識を持つ透谷にとって、地縁血縁に支えられた在地の生活感覚を原理とする地方民権家の政治活動などは遠い世界の事であった。もし透谷が地方の民権

運動に真に参加するといのであれば、透谷自身にとっても志士仁人の意識を越えない限りは不可能であったのではなからうか。

明治十七年秋から十八年夏にかけて執筆された「哀願書」に見る透谷の政治への姿勢はその当時の彼の政治的実践を背景とするものであった。ただそれは執筆の時点のそれではなく、その文中で、「曾テ」と呼ぶ、明治十六年末より十七年春頃までのそれである。その時点での透谷の政治姿勢を見ると、「児、曾テ経国ノ志ヲ抱イテヨリ、日夜寝食ヲ安フセズ、単ヘニ三千五百萬ノ同胞及ビ連聯皇統の安危ヲ以テ一身ノ任トナシ」⁽⁸⁾とあるように、一君に対し忠誠を尽くす、一君万民の思想が著しい。この思想は、明治十六・七年代に彼が入り込んでいた村落の複雑な階層構成を越えて、村落において彼を能動的に活躍させる余地を生み出す武器になっていた。というのは、この思想が村落共同体に広く深く沁み込んでいる忠君思想を媒介に蒼世万民觀を植え付けることができたからである。それによって地縁血縁とからまる階層性はのり越えられたのであった。透谷の一君万民論は、まさに遅れてきた草莽政治家の誕生であり、在地において孤軍奮闘する彼の行動の源泉となるものであった。前述した志士仁人の民衆觀はこの一君万民論と結びついていたわけである。

しかし、だからといって、このような壮士的一君万民論でおさまるような透谷ではなかった。彼の視野は世界へと向けられてもいたのである。例えば西欧と東洋とを対比して「憐む可き東洋の衰運を恢復す可き一個の大政治家となりて、己れの一身を苦しめ、萬民の為大いに謀る所あらんと熱心に企てを起こしけり。己れの身を宗教上のキリストの如くに政治上に尽力せんと望めり。此目的を成し遂げんには一個の大哲学者となりて、欧州に流行する優勝劣敗の新哲派を破砕す可しと考えたり」⁽⁹⁾と述べる透谷の民衆觀には、ダーウインの進化論を社会発展の原理の基準としていたスペンサーを批判する、ある強韌さも備わっていたのであって、単に「酔つて枕す美人の膝」の壮士の慷慨とは異質な意識を持ち始めていた。

このように民衆に対する考え方において壮士の觀念からの逸脱を見せてきた透谷だが、現実の政治行動においては相変わらず旧態依然であった。明治十七年春から初夏にかけて、三多摩の村落を小間物の行商をしながら民権運動の宣伝活動をして歩いた。そのいでたちは、襟に土岐の二字、背に運の一字、裾に來の字、つまり、土岐運來（時は巡り來た）と染めだした印半纏を着た奇異な服装であったが、それは後年、北村ミナの言うように「狂氣」⁽¹⁰⁾の為ではなく、やむにやまれぬアンビションを持ちながら、村落の民衆にアプローチする術を持たないよそ者にもかかわらず、それでも小集團の

地方政治家養成の合宿所である静修館に学んだ政治に志す青年としての熱気の具現化と見てよいだろう。東京専門学校在学中の宮崎湖処子は、当時の透谷を「此人頗る漫遊を好み、一旦飄然として出れば、五・六十日は帰りて来らず、蓋し一奇人なり」と回想しているのは、この当時のことである。

大矢正夫は透谷より四歳ほど年長で、しかも清廉潔白で無欲、しかも物事を深く思索する真摯なタイプだったので、透谷にとって心を許し合う親友になり得たわけであろう。この大矢正夫からの影響があったからであろうか、透谷は民権運動の中心部に入り込み、やがて自由党大阪事件に参加を迫られるところまでゆく。透谷が民権運動に深入りした明治十七年は、自由党が明治政府の激しい弾圧を受けて次から次へと潰滅していった時期である。そのため、せっかく民権拡張の夢を持って運動に参加した青年たちも目の前で権力の激しい弾圧に直面し、激昂したり失望したりしたのだが、やがて解体状況に追い込まれてしまう。もし透谷がこの時期より四・五年はやく運動に参加していたら、事態はまた違っていたろうと思うが、彼の参加した時期というのが民権運動の退潮期であったために、政治に対する理想の挫折を経験せざるを得なかった。透谷にとっては、実践からの退却を余儀なくされる時期が近づいていたのであった。そしてそれを決定づけたのが自由党大阪事件であった。

大矢正夫の自叙伝によると、彼は政治的挫折に苦しみ抜いた上で当時の自由党の指導者である大井憲太郎の指揮によって国際的な政治的陰謀事件に参加していく。この政治的陰謀事件というのは日本の民権家が朝鮮で当時の専制政府を転覆し、朝鮮の民権家と協力して民主政府をつくり、その余勢を駆って日本でも革命を起こそうとする計画であった。それだけ日本では国家権力にとっても抵抗できない状況にあった。まず朝鮮で日本の壮士の手による宮廷クーデターを実行し、日朝両国関係を緊張させ、日本国民のナショナリズムを利用するという陰謀で、大井憲太郎たちが画策し、その実行隊に大矢正夫らが参加したのである。その計画の実行のために資金を求めようとするのだが、それも直ちに行き詰まり、遂に、郡役所や村役場を襲って公金を強盗することになった。大矢正夫はその強盗に透谷の参加を求めたのである。親友の大矢たちが命を賭けて、革命計画のための軍資金を強奪すると聞いて、透谷は非常に動揺した。理想実現の手段の納得のできないものを感じて去就に迷ったからである。その陰謀に彼はついていけないと悟るや、頭を剃って僧侶の衣をまとい、同志の前に手について彼らの間から離脱していく。大矢正夫は、透谷という人の心が内面的で思索的な、普通の壮士と違う人間であることをよく知っていたので、何も言わずに許してあげたのであった。

ところが、こうして許されたことがまた透谷には心の負担となって、彼を苦しめることになる。ただその苦悩の中から、透谷は自分の進むべき道は、政治活動ではなく、思想の表現によって政治の理想を実現する方向だと直感するようになった。壮士たることを誇りとする親友たちと別れていったとき、透谷の前には思想家・文学者としての道が残されているだけであったといつてよからう。そういった意味で透谷の文学への道というのは、夢やロマンに憧れて、まず詩や歌を作ったりするといった普通の文学青年とはまったく違っていた。自由を求めての権力への抵抗、人道やデモクラシーといった日本の最初の民主主義運動の理想に身を焦がした挙げ句に、その志を遂げられず挫折させられるといった苦悩の中から、思想や宗教そして文学といった形での自己表現が模索されたのである。

これに対して、大矢正夫のその後のコースはどうであったであろうか。色川大吉氏の調査によると、明治二十四年「特赦により」出獄した大矢正夫は、いったん荻野村にかえって妻子と面会してからは、横浜に出て、公道倶楽部に入ったり、石坂昌孝をたよって鶴川村の野津田に寄寓したりして浪人生活を送っていた。やがて明治二十六年、妻子と共に、野津田の石坂邸に留守居かたがた住みつき、第二鶴川小学校に教師として奉職した。この年の晩秋、相州の前川村にいた透谷をともなつて、平野友輔を訪ね、藤沢の国府屋旅館で平野と対面させている。明治二十七年五月、朝鮮では東学乱が勃発し、日・清両軍は動きだし、戦雲は急に深くたれこめてきた。七月、ついに開戦となるや、大矢は難波春吉らとともに多摩組への参加を申し入れたが、刑余のゆえ許されなかった。そこで広島にいた石坂らを訪ね、度朝資金をもらって、二十七年十一月、めざまし新聞社特別視察員としてついに宿願の朝鮮に渡った。こうして難波、佐伯らと一緒に朝鮮の王妃、閔姫殺害のクーデター事件に加わることとなった。

このように、大矢正夫は、志士の感情におぼれ、世論の同情に甘えて、自己の主要な政治的目標を見失い、内部革新の可能性を失ってしまった。したがって、このあとの二人の関係は青春のよき日への追憶という点のみでつながら、思想の内実においては、交わることもない軌跡を描いて、しだいに隔たって行ったのである。

3. 透谷における民衆観の形成過程

小田切秀雄氏は透谷の自由民権運動からの離脱を政治との決別として把握し、「政治から文学へ」⁽¹³⁾という図式を作り出

した。この考え方は戦後の透谷研究者に無批判に受け入れられた傾向がある。しかし、透谷にとつて、これまで政治的対象であつた民衆は運動離脱後かえつて思想的に内面化されていったようで、彼の作品の中に重い位置を占めるようになったとみられる。それを明かにしていくために、透谷の作品の中で民衆にかかわるものを取り挙げて、内面化されてゆく民衆と作品との関係を考えてみることにする。

明治二十五年三月、雑誌『平和』の創刊号が発行された。そこに掲載された「ウイリヤム・ジョンス氏演説筆記」の冒頭に無署名の一文「『平和』発行の辞」が載っているのだが、勝本氏はこれを明かに透谷の文章であると見なしている。

ウイリヤム・ジョンス氏は前に英国平和會の書記を勤め、長く該の會の為に功勞ありしなるが、頃者其職を辭し奮て世界を周遊し、平和主義を唱導す。過ぬる明治二十二年八月我東京に來り數度の演説を試みられしが、就中厚生館に於て同氏が公衆の為に戦争の真相を演述せられし者最も吾人を益したり。我が日本平和會の興りしも實に此演説に負ふ所多し。吾人「平和」初號を刊するに當り、之を譯載する者豈其故なからんや。

この一節からしても、実際の政治活動から一転して、思想を持つて自己実現を志すようになった透谷の初期の思想がいかなるものであつたかを知る上で、この「『平和』発行の辞」は貴重な資料であることがうかがえる。この時期の透谷の思想的立場は、先駆的な反戦平和の思想を標榜するものであつた。これによれば透谷の平和主義なるものは、近代社会の階級的矛盾にまで視野が及んでいることは注目に値するが、それとともにまだキリスト教の枠には入り切らない人道主義やヒューマニズムの見えるのも特徴であつた。

まず、そもそも平和は、我々の最後の理想であるという末尾において、

夫れ兇器の横威、人倫を泯し、天地を冥うする事久し。特に歐洲に於て然りとなす。甘妙なる宗教の光明も暗憺たる黒雲に蔽はれて、天魔幕上に哄笑するかとぞ思はる。今や往年の拿翁なしと雖、武器の進歩日々に新にして、他の拿翁指呼の中に作り得べし、以て全歐を猛炎に委する事、易々たり。是よりの戦争は人種の戦争尤も多かるべく、塵戦又た塵戦、都市を荒野に變ずるまでは止まじと某政治家は言へり。吾人の、平和の君を世に紹介する、豈偶然ならんや。¹⁴⁾

と慨嘆しているが、これは、世界的規模に達した近代戦争における最大の犠牲者である幾百万の声なき民を重視し、その立場から戦争を批判するといった思想を展開しているものである。ここに民衆の視点が確固として捉えられていることは重要である。例えば彼は、『平和』創刊号の「想断々」という文章の中でこういつている。

一 蟻螻を害す。なほ釋氏は憐れみに堪えざりし、一人を殺す、如何ばかりの罪に當らむ。況んや百萬の衆生を殺害するをや。人を殺して法律上に罪を得ざるものは余の知るところにあらず、人を殺して泣かざる者あらば、余が鞭、之に加へざらんと欲するも得ず。⁽¹⁵⁾

ここに「釈氏」とあるのは釈迦のことであるが、仏教の殺生禁断を踏まえて戦争なるものが「況や百萬の衆生を殺害するをや」という民衆殺戮であることを明確に指摘し「人を殺す」ということへの根本的な反省、否定の思想が認められるのである。これがキリスト教に立つて説かれていない点は注目してよからう。彼の反戦思想がもともと西欧的・キリスト教的ヒューマニズムに基づいて形成されたのではなく、伝統的思考に根ざした彼の生来の思想であったからである。この反戦思想の文脈の中にすでに民衆という言葉が見えてくるのだが、実は彼の文章の中の民衆の登場の最初は、日本の「民衆」ではなく、ここにみえるようにヨーロッパのそれであった。同じく「想断々」には、

佛獨相對して兵備日に嚴なり、而して其中間に挿まれたる以太利は遂に如何ならむ。邦運久しく疲れて産業興らず。民多くは一種固有の疾疹に困しむ。而して国境を守るの兵は日に多く、瘦せたる民衆に課するの税斂は月に加ふ。先に拿翁の蹂躪に遭ひ、今後更に慮るところあり。昔日暴風雨を凌ぎ、疾雷閃電の猛威を以て、中原を席卷し去りたる夢は今何処にかある。平和の君、平和の君、切に此邦を憐れまん事を願ふ。⁽¹⁶⁾

とあるが、「瘦せたる民衆」というのは、仏独の下層の貧困階級に属する民衆のことである。社会の最下層にある民衆に対する、哀哭にも似た共感がこめられているのが認められよう。

このような民衆の捉え方の根底にあるものは、透谷と農民（＝民衆）とのあいだの原体験である。民権運動期に接触した農民＝民衆に対する深い共感と、彼らの貧困状況を直視したことによって培われた権力者への怒りがそれであった。こ

の深い共感が、実は、彼の反戦平和思想と民衆観を支える核心となるのである。この共感が生まれるにあたっては八王子困民党事件の発生した南多摩郡川口村で数カ月間生活したり、石坂公歴と多摩地方や相州を歩きまわったりして、その途中、土地を失い家を離れた流民の群れや、蜂起に立ち上りながらざるを得なかった困民の惨状を、つぶさに見聞する機会を持ったであろうことは、疑うことができない。

透谷の民衆観は、村落の収奪を繰り返すことで形成されていったところの日本資本主義の蓄積過程と対応して形成されていったのであった。特に、透谷の眼が新しい富と権力と生産とを集中する者に向けられたのではなく、その犠牲者たち、すなわち全国で数百万人を数える路上に投げ出された窮民の姿に向けられたことは、思想家としての彼の素質を物語っている。そこにはまた近代の世界を見る視点を社会の底辺にうごめく民衆に定めることによって、世界の全状況を浮き上がらせてしまうといった構造的な位置が示されることになる。このような民衆の視点こそ政治実践から思想の表現へと軌跡の中でも貫かれていたのであって、それこそ透谷における民衆の内面化であったわけである。

このような透谷における民衆の内面化は、彼の歴史認識によって一層深化されることになる。それが民衆意識を歴史の地下水として捉えようとする方法であった。それを彼は「地底の大江」¹⁷といているが、その地底の大江を遡ること、現在の民衆意識が前近代の民衆とどう連なるのかを考える方法論を手に入れることができた。そのことは、明治二十五年七月に発表された彼の代表的な論文の一つである「徳川氏時代の平民的理想」のなかに見事に捉えられている。そこで彼は徳川時代の町人文学を、頭から卑屈で奴隸的な戯作文学だと批判する人びとに対し、その町人文学こそそれまでは日本であげられることのなかった平民の声が認められるのだと、共感の姿勢を示すことから始めている。

その平民の声には、時代によって虐げられた人びとの深い虚無思想と同時に自由への満たされない渴望がこもっているのだとしているのである。このような認識を支えているのは、いうまでもなく、実践で培われた民衆への深い共感であろう。さらにその平民の声は、明治維新後になると、日本の歴史においていまだかつてなかった「空前絶後なる一つの思想」の萌芽になっているという。そしてその萌芽こそ、民権という名を持って起こってきた個人的精神であり、それは民衆があくまで「精神の自由」を求めようという欲望なのであると言い切っている。まさに透谷は江戸期の人民ニヒリズムのなかに明治の自由民権の一流流を探りあてていたのである。そういった歴史の深層を貫く民衆意識が明治維新以後、思想化していったことを透谷は「思想上の大革命」という言葉で表現する。この民衆意識を掘り起こしたところに成立する民

衆史観が遂に明治維新をも透谷独自の視座から捉えさせることとなる。それが論文「明治文學管見」の次の一節であった。

政治の現象界に於て舊習を打破したること、萬目の公認するところなり。然れども吾人は寧ろ思想の内界に於て、遙かに偉大なる大革命を成し遂げたるものなることを信ぜんと欲す。武士と平民とを一團の國民となしたるもの、實に此革命なり、長く東洋の社会組織に附帶せし階級の繩を切りたる者、此革命なり。而して思想の歴史を攻究する順序より言はば、吾人は、この大革命を以て單に政治上の活動より生じたるものと認むる能はず、自然の理法は最大の勢力なり、平民は自ら生長して思想上に於ては、最早舊組織の下に黙従することを得ざる程に進みてありたり、明治の革命は武士劍鎗にて成りゆくが如く見ゆれども、其實は思想の自動多きに居りたるなり¹⁸。

百年後の今日、これを読んで、透谷のこの明治維新論が少しも古くなっていないと感じられるのは、民衆の持つエネルギーを掘当てているからではなからうか。

4. 評論に表れた民衆観

透谷が訳したと思われるエッセイの「勞役社会と戦争」の冒頭にはこう書かれている。

貧乏社会は責任を有する僅少の人々の為に血を流し、困苦を受くることを否むべし。戦争中に数多の生命が亡ぼされ、巨萬の金銭が消費されることを聞くときは、其損害と困難は勞役社会の男女及び児童等の上に最も重く来ることを記憶せざるべからず。貴族及紳士は戦争の分捕物、則、勝利の名譽、爵位、勲章及び賞金等、皆之を得。然れども軍隊を成するものは大抵勞役社会にして、其中には或は募兵軍曹に誑かされて家を去り、業を棄てたるものあり、或は外国に於るが如く己の本意ならずも強迫せられて服役したるものあり¹⁹。

これは一九八一年三月の「懸賞問題答案平和雑誌」に掲載された論文であるが、透谷は早くから日本の資本主義の発展の過程で、下積みにされている幾百万人の民衆（「貧乏社会」「勞役社会」）、特に窮民たちの運命に深い共感を寄せていた。

その最も悲惨なありようが、戦時下の民衆であつたわけである。近代戦争が国家間の政治的利害の打算であるとすれば、民衆の悲惨をつくことによつて捉えられる彼の民衆観は、与えられた状況のなかで自足している消極的で、非政治的な「庶民型の人民像」をつきぬけて、政治（＝戦争）の犠牲者としての「貧民型の人民像」へと浸透していつている。彼の論文の基調となっているのは、近代社会から疎外され抑圧された民衆への深い共感と、彼らに対する抑圧を憤る社会批判であつた。同じ年の二月二十七日の日記でも、自分が構想したドラマの登場人物の口を借りて、こいつわせている。

一度吾れ人間の最下流に居れり。爰に居りて世界の惨憺の甚しきを見たり、其相喰ふ所、相嘯む所のすべては吾眼中に集まれり、政治を説く者は虚然之を説き、宗教をいふ者は恍然之を言ひ、而して此下流まで達せず。²⁰

つまり「人間の最下流」にいる人びとへの共感が、透谷にとつて批評活動の源泉になっていることが確言されている。透谷は明治二十三年の一月一日を期して、社会批判、政治批判、文壇批判、あるいは宗教界の批判を矢継ぎ早に始めるのだが、例えば文壇批判についていえば、その当時の文壇は、尾崎紅葉、幸田露伴、あるいは山田美妙といった硯友社の作家が全盛期であり、また森鷗外や坪内逍遙などが活躍していたときでもあつた。透谷は彼らを「歓楽者」と呼び、

何故にか余は當代の文學に満足せざる、曰く、唯時に遭ざるの文学多きを見ばなり。今は得意の月日に非ざるを、彼等は得意と思ひて歡喜の筆を弄す、今は憤慨する者を要するの日なるに、彼等は笑談すれども一滴の涙はあらず、片片積れる文字は、寧ろ時流に媚んとするに近からずや、然らざれば將自家の歡楽を暴露するに止るか。……誰か時代を慮るの小説家詩人は無や、滔々たる文学家中、何ぞ一滴の涙を眞に国家の為に流す者なきや。

と批判する。これは「当世文学の潮模様」という明治二十三年一月に発表した論文の一節である。ここで注目すべきは、彼のいう「国家」であろう。それはけつして明治期の国家体制を内容とするものではない。むしろ前掲した「貧乏社会」「労役社会」と等質の觀念であろう。それらの社会に呻吟する民衆に眼を注がぬ「文学家」等は「歓楽者」にすぎないというのである。透谷は最初にこの論文を発表すると、ひき続いて三月には「時勢に感あり」、四月には「泣かん乎笑はん乎」

といった胸を刺すような論文を発表している。そこでは、明治の社会は「外面の歓声」、外面では喜びの声を挙げているが、「裡面の血涙」、その裏面、内側では血の涙を流しているという社会矛盾があることを指摘し⁽²³⁾、「不幸を啣ち、非遇を嘆ずる者、幾百萬がある」と叫んでいる。そしてこうした現実こそ「粉碎す可き悪組織の社会」⁽²⁴⁾ではないかといひ、さらに

君知らずや、人は魚の如し、暗らきに棲み、暗らきに迷ふて、寒むく、食少なく世を送る者なり。家なく、助けなく、暴風暴雨に悩められ、辛うじて五十年の歲月を踏み越ゆるなり……天果して我が民を左くるか、天果して吾が民を沮ふか、粉々擾々たる社会の現象を一括し来り、詳かに是を觀察すれば、熱涙の期せずして吾が蒼頰を掩ふ者あり、嗚呼吾が民、戒心する所あれ。思へば何にが故に文學家を要する、何にが故に政治家を要する、何にが故に僧侶を要する。⁽²⁵⁾

といつて、時を得顔の旧自由党系の政治家やキリストの教えを説く宗教家、あるいは近代文学を語る作家たちの眼前にこの課題をつきつけている。こういった文章にこめられた透谷の民衆への共感には、まことに熱いものがある。

そして、こうした民衆への実感に基づく透谷の社会批判が明治二十四年から二十五年の執筆と見られている「慈善事業の進歩を望む」という論文のなかで、さらに深められたかたちで展開されている。ここで透谷は資本制社会における階級矛盾の問題に目を開き、貧民（人民、国民）と国家の関係を次のように考察しているが、この考え方には、先の「懸賞問題答案平和雑誌」の第十号の論調と共通しているものがある。

富める者、勢ある者、益求め、益集めて、而して赤貧宿る果なく、食ふ糧なき數百萬の餓孚を如何せんとする。一国の最多數を占むる者は貧民なり、而して一国の降替を支配する者も亦貧民なり。侯卿貴人は昌ゆるとも亦た衰るふとも、彼等は一呼吸にありて出来たり、又た一呼吸によりて没す可し、一国を守る者は勇敢なる勲勳なる農夫、若しくは貧民にあり、彼等若し一度滅されなば、国と家とを守る者、果して誰となす。⁽²⁶⁾

透谷にとっては、勇敢で勤勉な人民、また貧しい人々こそ国の富の源泉であり、国の創造と力の源泉であり、「一国の隆替を支配する者」だという認識を示している。このような人民（民衆）に対して国家はどうあるべきか、透谷評論の行

きつくところはそこにある。

透谷評論の焦点が「国民」であることに着目するのは、決して新しいことではない。戦後、あざやかな透谷像を提出し、透谷論の一つの定説を作ったのは小田切秀雄氏である。氏は、「政治から文学へ」のコースを自身のプロレタリア文学体験の先駆として発見したのだが、ただ近代的な人間観と文学の存在意義を確立した透谷が、「政治から文学へ」のプロセスにおいて「国民大衆から孤立」⁽²⁷⁾していた観念性が日本文学のその後の自己封鎖的なコースを作り出すことになった点を透谷の弱点として指摘する⁽²⁸⁾。以上の考え方は昭和三十年来の氏の透谷論に一貫している主張であり、その後の研究によって部分的な批判や修正は加えられているものの、基本的には変わりがない。その後、小田切氏の有力な批判者として登場してきたのが平岡敏夫氏である。氏は透谷作品にある観念的系列と現実的系列を単なる「分裂」としてでなく、統一的に把握しようとするところから出発している。そして、その視座をすべての透谷的なものの発する魅力の中心をなす「国民」に求めるのである。つまり「現実を拒否し観念的世界にわけ入りながら、しかもあくまで『国民』にかけることで生きようとする」ところに透谷の本質をみようとするのである。

この論に対して小沢勝美氏は平岡氏のいう「国民」概念のあいまいさを指摘⁽²⁹⁾しており、藪楨子氏も「北村透谷における国民・民衆の問題」⁽³⁰⁾という論文の中でその問題についている。一方、透谷作品の深い読みと文学史的状況の再検討を通して新しい透谷像を提出した平岡氏に呼応する形で、自由民権運動の側から光をあて、同じく透谷における民衆的観点をもつて新しい積極的な透谷像を示そうとしているのが色川大吉氏である。彼の企図は明治精神史の深層を流れる「自由民権運動の地下水」を汲もうとするところにある。その中でも「民権運動の敗北を痛覚をもってうけとめ、その挫折観を長く耐えぬいてゆく過程のなかで、自由民権思想の最良の部分を再生」した細流の象徴として透谷に注目し、勝本清一郎氏の年譜でも空白であった自由民権運動との関係の徹底的な調査に赴いたのであった。氏は民権運動期の透谷を明らかにする一方で、武相困民党などの「能動的人民」のエネルギーをも発掘し、それをとらえていない点に透谷の限界も「想世界」に傾斜して行った根本的な原因もあると指摘している。最近では、透谷の運動離脱後の思想深化のメカニズムについての研究はさらに進められ、その実績は氏の著書『民衆史』に集約されている。自由民権運動との関係資料が極端に乏しい透谷研究にとって、氏の積極的で綿密な研究は望ましいものであると考えられる。

透谷評論における「国民」の認識についておおむね以上のような研究史が見通せるのだが、無視してならないのは「国

民」と「民衆」（「人民」）とが必ずしも一致しないことであろう。これまで見てきたように、透谷にあっては「民衆」が歴史の実在であっても、どうも「国民」が実体を持っていないことである。それは「国民」の「国」、すなわちあるべき国家体制が彼の内で熟していなかったのではなからうかと思われるからである。結語でもふれるが、明治二十年代には共和制の理想社会が構想されたようだが、歴史の必然性の考察を欠いた机上の空論であったといわざるをえない。その点で透谷は在野の民衆思想家ではあったが、国家を構想する政治学者ではなかったのである。

5. 透谷の内なる民衆——結びにかえて——

透谷は明治十年代に起こった自由民権運動に、日本の作家としてはおそらくただ一人、最も深く関わった人間であり、その政治運動の挫折によって一時、極端な政治嫌いになる。そして政治から身を遠ざけて、宗教活動や内面的な文学活動に傾倒していったのであるが、だからといって、彼は少年時代に描いた、現実の政治を変革し、社会を改良しようという志を捨ててはいなかった。その志が、一つは平和運動、平和思想の宣伝というようなものに表現されているし、もう一つは「明治文学管見」などに示された明治維新に対する高い評価、しかも思想的な面で、評価するといった着眼のなかに現れていると思われる。つまり、透谷は、半封建的な明治という社会の「牢獄」のなかで、呻き苦しみながら、なおかつ自己の意志を実現しようとする民衆を見つめたのであった。その同じ視点から江戸時代の民衆の精神の自由への希求というものを、歴史の「地底の大江」と捉え、それが明治維新によって表面に現れ、自由民権運動に転化したという歴史認識を持ったのである。その一方で、理想論ながら、明治二十年代には近代的な人間が作り出す共和制の理想社会に向かって進む精神の自由、あるいは内部生命というようなものに着目したのであった。そのことは、透谷を単なる唯心論者、観念論者、あるいは遊民のように独善的な考えに耽っている高踏の人間だという批判に対して、十分答え得る行動であった。

透谷は、自由民権の志を、自分の苦渋にみちた体験にくぐらせ、さらにキリスト教でリファインすることによって真の近代的な社会批判精神に結実させることに成功したのであった。そのゆえに、あのような早い時代に、よく時流に抗して、平和主義と人間の尊厳のための戦いを進めることができたのである。透谷は明治維新以後のはげしい時代の嵐に遭遇してきながら、これらの衝撃を、ほとんど取捨選択することなく全身にうけとめた。自分の内部にひきこみ、歴史の底を這す

るようにして幾年もの間その重みに耐えつづけた。それにもかかわらず、片時も祖国と人民への関心を念頭から離さず、自己の魂を二つに引き裂かせながらも、死の直前まで脱出口を求めつづけてやまなかった、その一人の人間の全力的な生き方から、私たちはなお限らない歴史の教訓を学ばなければならない。

注

- (1) 平岡敏夫『続北村透谷研究』有精堂、昭和四十二年、九十一頁
- (2) 注(1) 引用書、同頁
- (3) 石坂ミナ宛書翰、明治二十年八月十八日
- (4) 早稲田大学蔵、記録「明治十七年第十二月新調第十五号ヨリ十九年迄学生名簿」東京専門学校
- (5) 色川大吉『新編明治精神史』自由民権運動史関係年表、中央公論社
- (6) 『草莽雜誌』明治九年六月
- (7) 題真影後

世途困難復奚疑	志存濟時望不羈
三寸篋裡蓄真影	何論青史姓名垂
自笑身世一蜉蝣	生死窮榮何必憂
區々丹心堅鉄石	一鞭又足振神州
- (8) 勝本清一郎編『透谷全集』第三卷、岩波書店、昭和三十年、一三五頁
- (9) 注(3) 引用書翰
- (10) 北村氏未亡人談「春」と透谷」、『早稲田文学』第三十一号、明治四十一年
- (11) 宮崎湖処子「透谷庵を憶ふ」、『国民新聞』所載、明治二十七年六月五日
- (12) 色川大吉『明治精神史(上)』講談社学術文庫、一九七六年、一九六頁
- (13) 小田切秀雄「私の透谷」(透谷全集付録3、昭和三十年九月)
- (14) 『透谷全集』第一卷、二八一頁

- (15) 注(14) 引用書、二八四頁
- (16) 注(14) 引用書、二八七頁
- (17) 注(14) 引用書、三五八頁
- (18) 『透谷全集』第二卷、一六六―一六七頁
- (19) 注(14) 引用書、二四四頁
- (20) 注(14) 引用書、二三六頁
- (21) 注(14) 引用書、二七九頁
- (22) 注(14) 引用書、四五二頁
- (23) 注(14) 引用書、二四〇頁
- (24) 注(14) 引用書、二三九頁
- (25) 注(14) 引用書、二三八―二三九頁
- (26) 注(18) 引用書、二四五頁
- (27) 注(13) 引用書、二七八頁
- (28) 平岡敏夫『北村透谷研究』有精堂、昭和四十二年、七頁
- (29) 小沢勝美『北村透谷』勁草書房、昭和五十七年、二一六―二二〇頁
- (30) 『日本近代文学』十卷、昭和四十四年、五月